

丸山の意地、横山の執念

3000mSCは春高から2名エントリーする。関東新人入賞まで進んだ丸山は何とか6位に食い込みたい。今回は駅伝主力高校がフルパワーで来ることを分かっているから、丸山も集中を高める。横山もこの種目に、決勝進出をかけていた。東部は2組独走で自己記録だったので、いよいよ県大会で大幅な覚醒を遂げたい。

決勝条件は4着プラス3。

まず1組のスタート。やはり農大三高が飛び出す。

安定して上位グループに位置する丸山。

順位を確認しながら3位で通過。まずは安心。

この段階で9分45秒あたりがプラス枠という状況だ。

それによって2組目の選手は目標値が決まる。



2組の横山はスタートから奮闘。



なんとか上位6人あたりには食い込みたい。

先頭は昨年2年生ながら1500m、5000mで関東2冠の農大三高の内藤選手だ。

1組より速いラップで周を重ねる。

横山は必死に食い下がる。

みな内藤選手に離されまいとペースアップ。



横山も5位につけ、最後はもう短距離のようなフィニッシュだ。

なぜならプラスに食い込むには0・01秒でも先着せねばならないから。

タイムは・・・！？

嵯峨根さんが「たぶん9分45秒だ！速いよ、いけるんじゃない？」

速報では9分44秒14！！素晴らしい記録だ。

1組の4位さえも上回る。プラス枠のトップになった。

続く3組はスローペース。私と嵯峨根さんは「よしっ！横山残るぞ！」と、確信した。3組のトップは横山より遅い9分44秒7だ。

「やったーっ！！」電光掲示板にプラス3名が発表された。

私は前回の東部コラムで、横山は遅い組に入れられ、強風の中、独走で自己新を更新した。だから県で、相応のメンバーと走れば、かなりの記録更新ができる・・・と記した。まさにその予測にたがわぬ結果となった。

なんと20秒もの更新を果たして見事に県大会のファイナルへ進んだのであった。冬季には這い蹲るような練習をこなし、最後の最後まであきらめない精神が、この結果に結びついた。東部の5000mは0.01秒に泣いたが、その仮は返した。見事だ。

私と嵯峨根さんはがっちりと握手を交わした。

副将として東部大会でも立派にチーム力の牽引となった横山。こういった選手が育っていることが、春高陸上部の、関根先生の目指すところなのだと思う。



心が震えた2000m

私は嵯峨根さんとスタンドのゴール上に陣取った。

降雨、1.5mの風、気温12度。底冷えするようなコンディションであった。

短距離、跳躍には最悪。記録は望むべくも無い。

2000mの山崎は今シーズン、調子が上がってこない・・・昨年2000m2年生ながら2位21秒台という成績を残している。不調の今年何とか県を6位でも乗り切れば、復活は関東で！・・・と誰もが願っていた。

山崎は2年前の大阪インターハイで、1年生ながら4000mRのセミファイナリストとなった。後藤、石川、田中の栄光と期待を一気に背負うこととなった。

「自分がやらねば！」その重責を負ったの二年間であったと思う。



東部地区の8位からして、決してスランプは抜け出てはいない。

心配した予選は、流しながら22秒88で一着通過。

「調子は上がってきたのか?・・・」やや安心した。

続く準決勝は2着+2なので、確実に2位狙いだ。

22秒55の2位でゴール。

「お!何とか回復したかも!」と、我々は喜んだ。

本来なら当然優勝争いをするはずだが、6位に食い込んで6月の関東までに間に合わせれば・・・と願う。

決勝は9レーンのスタートとなった。タイム順でも7番目だ。

せめて1レーンに配されなかつただけでもよしとしよう。

雨はあがった。

やや風も追ってくれている。

我々は祈る気持ちでスタートを待った。

バン!

山崎が飛ばす。

表情からして120%の力で最初から飛ばしている。

直線に入って5位グループが横並び状態だ。

しかし山崎はなかなか伸びない。

山崎の苦悶の表情が続く。

「頑張れ!こらえろ!あと30mだ!・・・」



レースは終わった。

無念の7位であった。

山崎はゴール後、精根尽き果ててうずくまった。

しばらく動けなかった。

補助員に肩を抱かれて走路を後にした。

我々の心は揺さぶられた。

結果は7位だったが、現段階で彼はベストを尽くしたのだ。

おめでとうとは言えなかったが、立派なレースだったと讃えて

あげたい。1年の新人戦から連続埼玉県大会入賞なのだから、

すごいスプリンターなのだ。



後藤、田中から

その後、田中俊、後藤乃毅からメールが届いた。

「残念です。しかしインターハイだけが陸上じゃあない。陸上が終わるわけではないから、県選手権や、将来も続けて頑張ってもらいたいです・・・」

その後藤たちも翌週は自らのインカレに備え、必死に練習中だ。

いずれ山崎と後藤ら先輩が、試合で見事な戦いを演じることを願って止まない。

37回 のもと齒科

その3へ